

町史

とっておきの話

279

只見町文化財調査委員会議長

飯塚 恒夫

いま残しておきたい只見とっておきの話 ⑥(最終回)

― 郷土の児童文学者 山内秋生 ―

山内秋生は、大正から昭和にかけて童話や評論など児童文学の分野で活躍した郷土の文学者です。秋生は、明治二十三年、

只見町大字二軒在家の山内啓吉・ナミの四男として生まれ、名は千代吉、後に秋生と改名します。同二十九年、六歳で小林小学校へ入学、同三十七年に卒業します。この年二月、日露戦争が起こり、長兄と次兄の二人が出征したため、中学に進む途が閉ざされた彼は、当時の雑誌『少年世界』の読者の縁というだけで巖谷小波に直接入門を乞う手紙を出したところ、許容の返事をもらったのです。

彼は翌三十八年二月上京し、巖谷小波の書生として住み込み、四月改玉舎中学校第二学年に編入し学業に励みます。しかし、この学校は海軍軍人の養成を目的とした学校で、軍人になることが入学の条件でした。同三十九年、次兄が戦地から結核で帰

還し療養中に没し、同四十年には父が結核を発病、その見舞いに帰省した彼も感染したのか、

九月上京すると間もなく咯血し、止むなく治療のため卒業を目前に退学して帰郷します。間もなく今度は父が亡くなり、不幸が続く中、しばらくは郷里で療養生活を送らざるを得ませんでした。この時、彼の生涯を決する文学への思いを固くしたのは、ないだろうかと思われまふ。秋生への改名は、この時に行っています。



▲郷土の文学者・山内秋生氏

彼は、翌四十一年十月再度上京し、本格的に執筆活動を始め、小波のもとで田山花袋にも師事し、小説「瞬間」「少年の夜」などを発表、雑誌の編集にも携わり、広く文人との親交を結んでいます。

明治四十三年五月、徴兵検査のため帰郷、健康は回復し甲種合格。ところが兄の発病によって、心ならずも郷里に止どまり、一時金山町の「鷹巢義塾」で教鞭をとるなど一年半ほど過ごし、翌四十四年十月上京します。

そして翌四十五年、彼は「少年世界」に童話の処女作「赤い花の咲く池」を発表して注目され、これが児童文学に進む契機となりました。この年、かねて親交のあった竹貫佳水・芦谷蘆村・鹿島鳴秋らと、日本初の児童文学団体である「少年文学研究会」を設立します。会の目的は、おとぎ話を超えた新時代の少年文学の研究、創作活動を目指す

という画期的なものでした。その実践的な同人作品集「お伽の森」「お伽舟」などを刊行し、児童文学に新しい方向を見出し注目されます。

「少年文学研究会」の創設とともに、秋生は「少年世界」「少女世界」などの児童雑誌や日刊新聞、婦人雑誌にも発表の場を広げ、毎年四〇篇前後の作品を書いていきます。作品集『父のふるさと』の「はしがき」に「美を求める心」が童話を書く心構えであると述べていますが、秋生の作品の人氣は、なめらかな美しい文章に定評があります。

秋生は、童話では『螢のお宮』『とんぼの誕生』『春の野の夢』など、少年少女小説集では『月夜の嘆き』『天空高く』など、空想科学小説では『海底探検』、再話物では『イソップものがたり』『二休と曾呂利』など多くの作品を書きました。また大正十一年に芦谷蘆村の日本童話協会の創立に関与、さらに大正十五年には、小川未明・浜田廣介らと童話作家協会を発足させ、研究、評論にも独自の見解を持ち、日本童話選集に執筆した「明治大正の童話界」は、近代日本児童文学史の原典と言われています。



▲山内秋生記念碑

戦後は、昭和二十一年に日本児童文学者協会に所属し、児童文学の重要性和文学的価値の向上のために、作品批評や指導に務めました。そして昭和三十八年、西条八十らと日本児童文芸協会から第五回児童文化功労者として表彰されました。

只見町でも昭和四十年、有志による山内秋生文学顕彰会が組織され、大倉平林公園に文学碑が建てられ、次の句が刻まれました。

「故郷よ 山川よ

つばめ来るころよ」

秋生はこの除幕式に参列し、祝宴のあと生家にくつろぎ、まだ感激の醒めやらぬその夜突然の病魔に襲われ帰らぬ客となったのです。

秋生はつばめをこよなく愛し、故郷への思いと重ねて「つばめ来るころよ」と今でも呼びかけているかのようです。